

学 界 情 報

The 33rd Annual Conference of the IEEE Industrial Electronics Society
November 5-8, 2007, the Grand Hotel, Taipei, Taiwan

2007年11月5日から8日にかけて、台湾台北市のグランドホテル(圓山大飯店)でIECON2007が開催された。IECONはIEEE Industrial Electronics Society主催の国際学会中最も大規模な学会であり、今回で第33回目を迎える歴史のある国際会議である。

55ヶ国、997件の投稿論文のうち41ヶ国の535件の論文が採択され、論文採択率は54%であった。前回バリで行われたIECON 2006の最終採択論文数959件に比べると論文数は大幅に減っていた。

その採択された535件中、79件が日本からのもので、台湾、中国に次ぐ3番目に多い論文発表数であり、IEEE Industrial Electronics Societyに対する日本の寄与度を表していた。

さらに、Opening ceremonyに続き行われたPlenary speechでは横浜国立大学の河村篤男教授が、Invited speechでは東北大学の小菅一弘教授、産業技術総合研究所の横井一仁教授、名古屋大学の福田敏男教授、筑波大学の油田信一教授がそれぞれ講演を行ったこともこの特徴を語っている。

前回より規模が小さくなったとはいえ、invited speechを含めて12から13並列のセッションが毎日3ターンずつ設けられ、3日間続いた。その内容はmultilevel convertsなどをテーマとしたパワーエレクトロニクスのセッションからbiomedical and healthcareといった実生活のサービス領域まで、広範囲のテーマを取り扱っていた。

その中で特に注目できたのは、この会議のロボット研究への関心である。従来のIEEE Industrial Electronics Societyのメインテーマだったパワーエレクトロニクスの論文発表以外に、今回はロボットに関する研究発表や特別講演、パネルディスカッションが目立っていた。上記で述べた日本の招待講演もすべてロボットに関するものであり、この他にもPlenary SpeechでドイツのHeinz Woren教授のドイツで行われているヒューマノイドロボットに関する講演、Tutorialでも韓国のKAISTのKim, Jong-Hwan教授のユビキタスロボットに関する講演があった。

これは会議の開催国である台湾が、ロボット産業を次期産業の重要な一つとして捕らえていることを示しており、IT関連の産業で世界に大きな貢献をしてきた台湾がIT産業の次にターゲットとしている一つにロボット産業を強力な候補としていることを見せている。

また、パンケットで席を隣にしていた韓国KAISTの教授から韓国のロボット産業にかける研究に関して個人的に話

を聞くこともでき、東アジアの、特にIndustrial Electronics Societyに関係する研究者たちがロボット産業に対しどれほど注力しているかがわかる機会であった。

しかし、実際の学会中の発表を聞く限り、技術のブレークスルーによるロボット産業の確立よりは、社会に新しい価値や文化を提案しよう(iPodのように)とする試みが強く見られていた。もちろん、そのようなアプローチも必要だが、やはりIESだけのパワーエレのフィールドで培ってきた技術による革新的なロボット研究もより活発に進めてほしいところである。

IECONはIEEE Industrial Electronics Society主催学会中の最大学会であるゆえ、IEEE Industrial Electronics Societyが対象としているすべての分野の研究発表が行われている。昔ながらのパワーエレクトロニクス、モーションコントロール関連からロボットやネットワーク関連、センサ・アクチュエータ関連、画像処理を含めた情報工学、及びITSなどの自動車システムまで領域を広げている。そのためかえって会議の特色が薄くなり、それだけ論文投稿者や会議参加者から見た学会の魅力が少なくなっていることも否めない。

さらに、今回のIECONはビザ発行の問題などで論文が採択されながらも発表に来られなかった人が多く、no-showが普段よりも多く目立つなどの問題点ものぞかせていた。

今年のIECON 2008はアメリカフロリダ州のOrlandで行われる予定である。

呉 世訓 (東京大学)
(平成 年 月 日受付)



写真1 基調講演中の横浜国立大学河村教授